

ときには、辛口

21

◆老母のたしなみ

元気の理由

大学を定年でやめてから間もなく二年が過ぎようとしている。

年をとって老人になった自分を想像するころなど若い頃はほとんどなかった。今現在を生きることに懸命だったからだろうと思う。それに七十をこえて生きられる保証もないし、年をとったあとのことなど考えたって仕方がないと思っていたようだ。

しかし、予想に反して(?)七十をこえる年まで生きてしまった。「感想は？」と尋ねられたらどう答えるか。たぶん今の若い人たち



松本道介
Matsumoto Michisuke

と同様「べつにー」と答えそうな気がする。ひとつには、十年二十年前と同様に身体もよく動くし、けつこういそがしいからである。何にいそがしいのか——。週に三度老母の入る介護ホームへ出かけるからである。老母は九十六歳、格別に皺が多いわけでもなくそれなりに元気だから、老母を診ている女医さんは息子の私を“御主人”と間違えたことさえあった。

間違えられた時は憤懣やるかたない思いをしたが、母親が元気なのは有難い。周囲には認知症の老人がいっぱいいいて子供が来ようが孫が来ようが誰だがわからない。それでも訪

ねてくる身内の人たちには頭が下がるし、私のように、息子と話も出来るし百人一首やトランプもつきあえる母を持つ人間がやって来ないとしたら、罰あたりだと考えて、週に三度行くことにしたのである。

トランプや百人一首は老母一人とはなく老母と親しい九十前後の老人をまじえて遊ぶから、七十そこそこの私などまだ若者の部類に入り、気持が若くなれるという功德もある。

“明治女”と一緒に遊ぶ「百人一首」

百人一首のさい私はもっぱら読み手をつとめるので、昔はほとんど知らなかった歌をずいぶんたくさん覚えてしまった。覚えるとともに歴史を少し調べてみたところ、歌のほとんどが千年くらい前のものであり、一番古い歌のひとつである「春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山」に至っては千三百年も前のものであることがわかった。

ヨーロッパの千三百年前といえば、ドイツとかフランスとかイギリスとかいう名前の国もなければ言葉もなかったのであり、その頃につくられた詩など専門の学者にしか理解できないだろう。

だが「春過ぎて……」の歌は日本人なら今だつて誰が読んでもわかる。当時の日本語は学者にしかわからない古代日本語といったものではなく、基本単語も文法も現代と同じ日本語だからである。

これは他の国々から見ると驚くべきことであり、どれほど自慢してもしきれない事柄ながら、あまり自慢すると国粹主義者呼ばわりされかねないからこのへんでやめておくが、誇りだけは持ち続けたいと思う。

老母たちは百人一首を覚えていただけではなく、書く字も美しい。別に母の自慢をしているのではない。明治の女というのか、母の世代の女はみな字がうまくて、私の書いた字など横に並べると文字通り金釘流というしかない。お茶もお花もきっちり出来るし、お辞儀の姿なども見事だ。

息子の私はそこに母の世代の教養を感じる。そんな感想を母に話したら、母はとんでもないと行って否定した。教養なんかではない、せいぜいがたしなみだ、と言ったが、なるほど母の文字やお茶、お花はたしなみとして身につけている。惚けも進んで三十分前に食べれた食事を忘れるくらいながら、たしなみだけ

はいささかの衰えもない。

クルマもパソコンも無縁に

私の世代に共通するたしなみ、身についたたしなみといえば、クルマにゴルフにパソコンといったものだろうか。しかし私はそのいづれにも無縁のまま年をとってしまった。

クルマだけは四十年前に多少試みたことがある。あと一教程で免許がとれるところまで来たのだが、足先で軽くアクセルに触れただけで凄いいスピードの出るのが薄気味悪くてやめてしまった。

たしか十万円位をふいにしたのだと思うが、今もつて後悔はしていない。クルマに乗らないからゴルフもやらない。スポーツはたいいてい好きだが、ゴルフは走らないスポーツなので気持ちもそられなかった。そして文字は下手でも自分の手で書きたいのでワープロを使う気になれず、結局パソコンもやらないままこの原稿も手書きで書いている。何度も書き直し、写し直しては仕上げている。

パソコンで書くこと楽ですよ、と今でも人にすすめられるが、私は手書きにこだわる。器械の世話になろうという気持にはどうしても

なれない。明治生まれの父や母から伝わる精神がからだの中に巣くっているせいだろう。自分の身体を用いて汗水を流して生きるのが天の理にかなった生きかただ、といった思想なのか信仰なのか得体の知れないものに導かれて私はここまで来てしまった。

この精神を日本人は千年も二千年も守り続けてきたに違いないが、では日本だけのものかというところ、そうではなさそうだ。中国とてインドとて、そして西洋とて人類は古来皆汗水を流して懸命に生きて来た筈だ。

そこへたまたま、この二百年ほどの西洋がいくつもの機械を發明して戦争に勝ち、日常生活の万般に迄機械を普及させて人間の身体を甘やかし、さらには精神までを甘やかして退化させつつある。

機械は自力では動いてくれない。石油をはじめ膨大なエネルギーを投入しなければ動いてくれない。それに今後五十年くらいの間に世界人口が九十億くらいに達することもほぼ確実らしいし、この地球にそれだけの数の人間を養うだけの食糧も燃料も水もないのだとすると我々の将来はどういうことになるのだろうか。

(中央大学名誉教授)